私を変えた一冊

オラフ・ステープルトン著
『スターメイカー』

浜口稔[x]

科学・技術は人間から潤いを奪い想像力を枯渇させる。文化と教養を担う分野があり、数字や記号や機械を操る（非人間的な）分野がある。大した根拠を言わない無闇な科学批判を耳にすると、文系の身ながらいつも鼻白む。どのみち科学・技術も芸術も、数字や記号で、あるいは色や形で、天地に鍬を入れる反自然的な技ではないか（ちなみに、技術も芸術も英語では同じ art である）。想像力は科学・技術から力を得て驚異的なスケールを獲得することがある。その見事な手本を英国の幻想作家オラフ・ステープルドンの諸著作に見る。主著『スターメイカー』では、宇宙に遍在する諸人類が科学技術を介して破壊と覚醒を交互させつつ知的存在として進化していく。SF 仕立ての哲学的寓話であるが、人類が進化のたびに身体と感覚を変容させ視野を拡張していく場面は印象的だ。世界が美的に切り替わって、はっと驚く。技術が想像力を媒介にして芸術へと化ける。その表現が鮮烈で、読み返すたびに元気が出る。

技術は絶えず批判すべきだが芸術の対極に置くべきではない。身近な例を挙げよう。携帯電話の利用者を見えない電子の鎖につながれた奴隷と速断する人は多い。そんな見方は一面真理でしかない。電子の鎖で人間を縛るのは、旧態然の組織が強いる従属の論理なのだ。もちろん、技術が人間を追いつめストレスをもたらす現実も歴然としてある。この作品に登場する諸人類にしても技術のせいで種として倒錯し自滅する。しかし技術に縛られるも開放されるも、それを使いこなす人間の姿勢ひとつで決まるのだ。携帯電話ははた迷惑な代物でもあるが、硬直し体制と化した頑迷な精神の抑圧をかいくぐって若々しい文化を播種する神出鬼没のツールにもなる可能性を考えていい。

『スターメイカー』の醍醐味のひとつは、科学技術が保守的な精神を解体し新奇な世界を開示する道筋を、未来人類史を虚構しながら鮮やかに例示してみせたことにある。

---

xはまぐち・みのる／理工学部助教授／言語思想史